

2012 7/10

No.1926

毎月第2・第4火曜日発行

政経 かながわ

一般社団法人
— 神奈川政経懇話会 —



横浜市中区の三溪園で半夏生(はんげしょう)が6月30日、見ごろを迎えた。半夏生はドクダミ科の多年草。夏至から数えて11日を暦で「半夏生」といい、このころ花を付けるためこの名前が付いたとされる。白く染まった葉は、花が散ると再び緑色に戻る。



視点・点描	3
二人船頭の愚 解消は歓迎	
政 治	4
早期解散めぐり攻防一層激化 年内選挙、再編求める声	
政 治	6
消費増税の手続きに疑問符 首相公選で政治の改革を	
経 済	8
考える企業家を育成 「ワールド・カフェ」で成果	
くらし2012	10
日本製デニム、内外で高評価	
企業最前線	12
危機回避へ新手法	
広告珍談	14
～福沢諭吉のおしえ⑦ 欧化論を実現した	
経済反射鏡	15
新経連の滑り出し好調 ネット選挙も政策目標	

事務局だより

◇横浜定例講演会

2012年7月17日（火）

14時～15時30分

ホテルニューグランド

講師は日本銀行横浜支店長の

竹澤 秀樹 氏

演題は「最近の金融経済情勢
について」

◇横浜定例講演会

2012年8月21日（火）

13時30分～15時

ロイヤルホールヨコハマ

講師は原田武夫国際戦略情報
研究所代表取締役(CEO)の

原田 武夫 氏

演題は「国際経済と朝鮮半島
情勢について」（仮題）

視点 点描



二人船頭の愚

解消は歓迎

国民に不人気の施策のチャンピオンといえば、増税だろう。その是非をめぐる政権党の民主党が分裂した。野党の協力を取り付けて衆院での消費増税法案の可決にこぎつけた野田佳彦首相。その路線に反発した小沢一郎氏が、自分に近い議員を引き連れ、集団離党した。この冊子がお手元に届くころには、既に「小沢新党」が産声を上げているかもしれない。

今回の民主分裂劇の主役を演じた小沢氏の経歴をたどると、新党を立ち上げては土台から壊す、スクラップ・アンド・ビルドを繰り返している。

幹事長まで務めた自民党を離党し、新生党を結成したのが1993年6月。その後の足跡をたどると、新進党結成(94年12月)↓自由党結成(98年1月)↓民主党と自由党合併(2003年9月)と続き、

今回の小沢新党結成にたどり着く。まさに壊し屋の異名そのままの立ち振る舞いである。同氏の動向から今後も目が離せないが、最も気になるのは、小沢氏や同氏と行動をとにした50人近い国会議員が、どんな「旗印」を掲げて新党を立ち上げるかである。

税金の無駄遣い撲滅など一定の条件が整えば、景気の動向もにらんで導入も「あり」なのか。「反増税」の旗を掲げるにしても、旗色は微妙に異なる。小沢氏にはまずこの点を明確にしてもらいたい。

離党届提出後の記者会見で小沢氏は、民主、自民、公明の3党による衆院での消費増税案可決について、「国民への背信行為」などと厳しく批判した。だがその一方で「消費増税反対」とは一言も言っていない点に着目すべきだろう。反対しているのはあくまで「消費増税を先行させたこと」であり、「増税の前にやるべきことがある」との主張だ。裏返せば、増税自体には賛成ということになる。

国民に負担を強いる消費増税はこのままずっと「封印」するのか。

(神奈川新聞社
統合編集局長・宮本 敏也)

欧化論を実現した

図をご覧ください。1905(明治38)年1月2日に掲出された、全ページの年賀広告である。ところが中身は、呉服屋が百貨店になると宣言した、記念碑的広告である。

コンビニやスーパーで、簡単にモノが手に入る現代。かつて、なんでも揃ってる店はなかった。きものだけ売る店が、百貨すべてを商うとタンカをきった。《当店販売の商品は、今後一層其種類を増加し、凡そ衣服装飾に関する品目は一棟の下にて御用弁相成候様設備致し、結局米国に行わるるデパートメント・ストアの一部を實現可致候》。店舗を一新してあらゆる服飾用品を取り揃え、アメリカの百貨店を實現すると。その大改革を行ったのは高橋義

雄。「私としては三井銀行に勤務する方が、仕事も立派だし世間体も上品であるが……新時代の要求に応じて日本の小

売法革新に我が力を試みやうと思つたからである」と、

自伝『筈のあと』に書く。そう、高橋は三井銀行の大

阪支店長であった。小林一三の上

司で、慶応義塾の先輩である。

1861(文久元)年水戸の生

まれ。慶応で福沢諭吉に師事。『時事新報』の記者として5年間活躍。

在職中に近代経済論を執筆。アメリカへ留学、百貨店を調査研究。

91年帰国、三井銀行へ入社。95年、

営業不振にあえぐ三井呉服店の改革を一任された。

三井グループの根幹である老舗呉服店の改造。延々とつづいてきた店員の組織から手をつけた。丁稚・番頭制度を廃止、住み込みや年季奉公から給料制に。女性店員



稚に何々の品を持ってこいと命じた。商品は客の前にはなく、奥に仕舞われている。この「座売り」を変革した。すべての商品を店内に陳列、客は品物を見てまわり、売手も立ったままで対応する「陳列販売」である。

大手術の強行。番頭どもは大反対、もちろん押し切った。新しい時代の新しい店舗になると、デパートメントストア宣言。師福沢が展開する、欧化論を實現したのである。

先生と呼ぶほど高橋を尊敬する小林はこの年、三越へ移籍を願った。しかし、君は「我儕なる人物なりと評あり、年少気鋭の致す所と存候とも……」と、高橋からの忠告の手紙を小林は生涯、秘蔵していたという。

(美術エッセイスト、茅ヶ崎市在住) (図) 三越呉服店の全ページ年賀広告・1905(明治38)年1月2日掲出